〈資料〉　平成26年度　講演記録

第60回　幼児教育研究会　平成26年6月12日（土）

講演『幼児の成長にとっての遊びの意味』

大妻女子大学　柴崎　正行　先生

今日は，幼児の成長にとっての遊びの意味という題でお話します。遊びというのは意外と難しいのです。何が遊びなのだろう。それから遊びで遊べているのか遊べていないのかなど色々な言い方がありまして，そういった意味で今日は割と基本的なことを概念整理しながら，そして保育を本園の研究テーマの「遊びを探る」と「遊び込む」という遊び込む中での学びとは何なのだろうということに近づいていきたいと思っています。

今日は保育園関係の方が８割近いので，そのような方に分かりやすい形で事例を出しながら０歳から３歳未満を含めてお話ししたいと思います。

まず，遊びという概念を正式に保育の基準の中に取り入れたのは平成元年の幼稚園教育要領が初めてです。私も教科調査官をしておりましたので，なかなかこれを法律用語に入れるのが至難の業だったことを思い出します。しかし，いろいろな活動をすることによっていわゆる遊びというものを定義まではいかないまでも，誤解されないように説明して，それによって理解してもらおうということで，幼稚園教育要領の解説書だけでなく保育指針の解説書の中でも繰り返し書かれています。

まず，遊びが成り立つこと，つまり今目の前の子どもがちゃんと遊んでいるということがちゃんと成り立っているかどうかという条件があると思います。その一つ目は，きっかけはともかくとしました。いろいろな経緯があったにせよ，今，目の前で子どもが自発的な活動をやらされているのではなくて，自分からしているという意識でしっかりと活動している。自発的な活動である遊びはという風に教育要領，保育指針では書いてあります。自発性というのはとても大事です。きっかけはいろいろあると思います。全部自分から始めるわけではないですよね。例えば，紙飛行機を一斉でつくって飛ばして，面白かったという経験があって，次の日も取り組んでくるという子もたくさんいます。最初の方はどちらかというと受け身で，一斉に教わったというような活動ですが，二日目以降は各自，自発的な活動に変わっていくわけですね。だから何かを教えてはいけないというわけではないのです。ただ，一回教えたからそれでおしまいということで，次から次へと先に行かれたのでは困りますよね。「先生今日も紙飛行機やりたい」と言ったら，「それは昨日の活動だよ。」と今日は違う予定があるからというのでは，困るわけです。昨日やって興味がある子がたくさんいたら，じゃあ，どうぞと続けていけばよいわけです。そうすると自分なりにいろいろと遊びを展開していくようになるという意味です。それから今触れましたが，展開の仕方というのは子どもが主体的に決めていくということです。つまり，指導計画をつくりますがその通り子どもがなっていくことがよいわけではないです。そうなら

ないこともたくさんあります。子ども自身も，いつもこれしたらあれしてこれしてと先を見通して活動しているかというとそうでもないというものです。見通していることもありますが，そうでない時もあります。それはまさに子どもがここまで見通してやってみたいと思ったり，どうやったらいいかわからないから，成行きに任せてやってみようとしたりと展開の仕方が様々ありますが，それはやはり子どものペースを大事にするということですね。例えば，ダンゴムシ探しを始めた子がいたら，今日は十匹，明日は二十匹ということではないのですね。中には大きいダンゴムシを探す子もいるし，家族みたいなものをつかまえてきてずっとそれを可愛がっているのが好きだという子がいるかもしれません。それぞれなのですね。一番自分が大事にしたいことを展開の起点にしていくわけです。それから三つ目です。これも大事なことで，どうしても大人というものは今これが必要だからこういう結果を出してほしいとう因果論的な目的観というものがあるのですね。でも乳幼児期はそこまでいかないです。幼児も５歳後期くらいになるとそういう目的観をもてますけど，はじめの頃はそうではないですね。だから最初から目的があるわけじゃないのです。例えば，ダンゴムシを見つけていた子ども達がいたので，「どういう目的があってダンゴムシ探すの？」と聞いたら，「ダンゴムシ５０匹捕まえて，それをいくらで売りたい。」とそういう目的がたまにはある子もたまにはいるかもしれませんが，基本的にはないですよね。だからはじめからないのだけれど，じゃあやっている最中に目的が出てこないかというと，出てくることだってあるのです。虫を探しながら，他の子がたくさん集めていると，はじめはそんなにたくさん集めるという目的がなかった子が，やっぱりたくさん集めたいなという気持ちが変わって，誰にも負けないくらいたくさん集めようということで必死になって集め始めるかもしれません。そういうようなことがあると思うのです。だから大人みたいに段階的な目的をもって，それを実現していくということではないのだけれども，今取り組んでいることの中で心が動いて，段々目的をはっきりと明確にして共有して，それでそれに向かって努力していくということはあるのです。そこが自由だからこそ遊びが長く続かなければいけないということはないのです。ちょっとやってみて何か目的観が得られないとつまらなくなるのです。もういいや，これだけやったからと言って次の遊びを探して別の場所に行くということは許されることなのです。それを朝登園して，「今日は何して遊ぶの？」と聞かれて，「これして遊びます。」と言ったら，それ以外しちゃダメよと言うことではないのです。それは自分達が選び取っているのです。選び取りながらより面白いもの，探求していきたいものというのに近づいていき，それに出会ったときにはかなりの時間をかけて納得するまでそれに取り組む，それを繰り返していくのです。最初からできるわけがないのです。それから，そうやって目的観が明確になってきた時には，納得するまで繰り返せるということです。また今日も一日ダンゴムシ？というわけではないのです。何かやはり目的観があって，それがうまくいかないので今日も納得するまでやってみたい。それを繰り返しながら納得するよう

な結果が出てきて，もう十分やったからいいと思った時にダンゴムシを卒業して次の面白い遊びを探し出していくのです。多分こういう繰り返しの中で人生の中で最初は何をしたら分からないのだけど，段々面白いものを見つけてきて，自分にとってこのことに生涯をかけてもいいという仕事に出会ったら，それが長く続くように繰り返していくのですね。そういう意味では遊びというのは人生の原点みたいなものなのですね。こういう基本的な条件というものがあると思うのです。それを丁寧に見ることなく，何となく子どもが群れて何かやっていたら，遊んでいるということではないのです。遊びに向かっているかもしれないのだけれども，そこで何にどう取り組んで，どういう気持ちに動いているかという読み取りは必要です。いかがでしょうか。難しいでしょうか。だから，一番怖いのは，何となくいろいろな遊具を用意しておいて，それで「さぁ遊んでいていいよ」と言って，教師が別のことをやっているということです。それはやはり子どもの遊びを見ているわけではないのです。ある意味放任しているわけです。私は放任していけないというわけではないのです。やることがあったらやっていてもいいけれども，子どもが何をしているか，どういう気持ちなのかを読み取りながらやりなさいという話です。そうでないと，子どもが困ったり，危険にさらされたりすることがあるわけです。例えば園庭で遊んでいていいよといったときに，気の利いた保育者であれば，園庭が見える位置でどうしてもやらなければいけない仕事をやって，でもチラチラと見て危険がないかな，あのグループのケンカいつもやっているけど今日はやっていないぞなどの安全や安心感を確かめながら，それでちょっと危ないなと思ったら，ちょっと仕事を抜いてサッと行ってそこを予防してまた戻ってくる。つまりいろんな仕事が忙しくなった時に，今私が事務的な仕事をやるのだから，子どもはある程度放任しておいて，ケガがない程度遊ばしておこうとするとしたら，ケガがないような遊びしかさせない。室内で手先を使う遊びしかさせなければ，まずはケガはないですから，それが山ほどあればそれを一生懸命使って時間だけはつぶせます。それは遊びではないでしょうという話です。こちらの都合で遊ばせているだけです。今そこが区別できなくなってきていることがたくさんあるのでとても心配です。私も巡回相談で幼稚園，保育所をたくさん回っていますが，本当に最近多いのです。指先で組み合わせて時間をいっぱいつぶせる遊具が。悪いとは言いませんけど，それは家庭でやってくださいという感じがしますね。園は集団生活の場です。子ども同士が育ち合う場です。その体験を今しなかったら，小学校以上はもっとしにくくなりますよね。だから今のこの時間で，何を自分たちが保障してあげなければならないかという自覚がないということが一番怖いということです。

遊びって，例えば年齢はどうなのだろうと思ったら，0歳もやっています。例えばガラガラがありますよね。0歳時の手元にガラガラを置いておけば，もう自分で取って音を鳴らしてニコニコしていますよね。これは遊びです。0歳からも遊べるのです。こちらから手に持たせようとして何回振りなさいなどと言っているわけではないですね。もう自分で判断していて，そのうち飽きて

ポーンと放り出すと，わーんと泣いてもっと違うのにして，飽きたといくかもしれないですね。それからお年寄りの旅行も遊びだなと思うのです。誰に命令されているわけでもないし，親しい者同士でどこに行くかを決めて，何を食べるかを決めてちょっとお金のかかる遊びですね。年齢は全てです。死ぬまで「遊ぶ」ということはやっているのです。遊びがなくなったらつらいですよね。自由がないのですから。いつも言われたことをやっているのですからね。それから人数はというと，これもびっくりです。一人からたくさんの集団までです。だから一人でサッカーゲームをやっている子もいるのです。今はゲームソフトがいっぱいありますからね。あれも遊びです。W杯もありますでしょう。あれも壮大な遊びです。サッカーが好きで見ている人達，応援している人達にとっては遊びごっこですよね。そう思うと，これもすごい人数の差ですよね。世界中が気持ちを一つにして遊び心で楽しむということがあるわけですね。それから時間はと言うと，これも実はちょこちょことやってでも，十分にやったからいいやとすぐにやめてしまうこともあれば，本当に長い時間何度も何度も取り組んで自分が納得するまで何かをつくってみるという，そのつくってみるというところまで，表現力で見れば芸術も一種の遊びの延長線上ですかね。誰に言われたわけでもなく，どういう絵をいつまでに描きなさいとね。私たちのように趣味の絵は何時間かけたって誰も文句言いませんよね。でも，それだけ納得するまで何日も何日も描くかもしれない。だから時間も多様なのです。ただ，その場の環境には大きく左右されるなということは分かります。これも私の経験で，私が生まれ育った町は北軽井沢で，キャベツ畑とリンゴ畑と酪農しかないのです。そうすると学校にはプールがなかったのです。じゃあ，川で泳げるかというと，川は冷たいのです。そうすると誰も泳げないのです。だから私も泳げなかったです。だけど，町は水泳教室というものを年に5回くらいしていました。町にたった一つのプールがあるのですが，そこにバスで連れていかれて2時間くらいしました。泳ぐ格好くらいは知ることができました。大学生時代に子ども会で「お兄さん泳げる？」と聞かれて「当ったり前よ」と言っていました。息継ぎができないので，短い距離だったら何となく泳げるのです。これもしょうがないですね。環境のなせる業ですね。環境がなければ子どもは遊ばない，遊べないということになると思うのです。そういう意味で保育所がどういう環境で認可されるかということは大きな条件なのです。みんな遊べるのです。実際遊んでいるのです。だから，子どもだけでなく皆さんも遊びというものがなかったら充実感のない生活になるかもしれないと思います。

その次は，これまで遊びの研究で遊びにはどんな遊びがあるのかということは，概念的には整理されてきているわけです。感覚運動遊び，構成遊び，造形遊び，探索遊び，見立て遊び，なりきりからつながってきたごっこ遊び，それからゲームや競争，こういったことが遊びというか，種類としては多分皆さんも会話の中で，○○ちゃんいろいろものをつくっていたねと構成について見るだとか，○○ちゃんは何かになりきって踊っていたわとか，レストランごっこもなかなかメニューが決まらなくて大変よとか，

そのとなりのマックは本物みたいですごい人気が出ていたね。それからみんなでゲーム遊びしましょうと外でいろんなゲームをしますよね。それからリレーやったりサッカーやったりといろんな競争的なものもあります。それによって何が成長するかというと，まず感覚運動遊び，今日も感覚運動遊びをしていましたけれども，一般的な保育所幼稚園で見ると，ブランコだとか鉄棒だとか登り棒とか滑り台だとかたくさんありますが，これはみんな感覚運動遊びになります。これは身体そのものです。自分の身体を自由に操作できるという，そういう成長なのです。だから５歳くらいまでに，鉄棒前回り，後ろ回りみたいなことは結構早くできるのです。ところが小学校を過ぎてしまうと，三半規管が完成してしまうのでぐるぐる回ると気持ち悪くなるのです。そうすると段々苦手になってくるのです。体操選手になる子ども達は，大体３歳，４歳，５歳くらいからクルクル体を自由に動かすようなことを始めて，そしてもう目が回らないような，そういうような成長に結びつけていくのです。

それから構成遊びです。これが今多いですよね。ブロックだとか積木だとか何かを合わせること，つなげることによってある形をつくっていく，パズルみたいにはめ込むことによって何かを完成させる，構成するということですね。これは結果が結構出てくるので，分かりやすいのです。皆さんが名前を聞いたことがあるようなフレーベルだとかモンテッソリはみんなこの構成遊びを念頭に置いた教材なのです。それがこれまでには結構評価されてきているのです。そういった影響もあって小型の積木，ブロック，そういったものが今もたくさん売られています。しかしこれはそれ以外には使えないのですね。だからブロックでつくった剣なんて，危なくて戦いごっこに使えないですね。ケガさせちゃう。玩具メーカーは構成遊びのできる教材は家で割と静かに遊んでくれるから，園でも都合のいい時にはいっぱいそれを出しておけば，それなりに大人しくしてくれるわけです。全部が悪いわけではないのです。時と場合によってそれは必要な時もあります。しかしそれがメインになってしまったら，それ以外の力が育たないのです。そうなってくるとそれは問題です。思考力というのは，形だとか数だとかそういったものはどんどん伸びますから，何となく親は喜びますよね。ユニークな形を知っているだとか，数を百まで数えられるだとか，いろんな意味で親は喜んでくれます。ただ，それをもっと発展させると泥粘土で遊んでいて思ったものをつくれなくて苦しんでいた子もいましたね。これはいろいろな素材を使って好きな形をつくって表現する様子です。これは構成的なこととはずいぶん違います。構成遊びでつくったものは自分のものにならないのです。一応完成はするのですが，遊具そのものはみんなの共有すべきものですよね。ところが造形でつかうものは大体個人に与えられます。粘土にしろ，紙だとか段ボールだとかそういったものは誰が使っても，それは自分のものになるのです。しかも組み合わせ方が決まっているわけではなくて，いろんな組み合わせができる。造形を楽しめるという人は，創作力という，クリエイティブないろいろな自分の発想で新たなものを生み出していくということがいっぱいできるのです。

それが実は大きな意味をもつのです。だから構成遊びと造形遊びは似たように見えるけれども，意味的にはずいぶん違います。ここまでが一人でも遊べることです。そしてそれから先ほどの研究でいうと「もの」なのです。基本的にはものです。これから先になると今度はものだけでなく，「こと」ですね。集団遊びになると，ゲームなどで社会的なものになります。探索遊びというのは，どこになにがあるのかを環境を理解していくということで，どこに何があるかということの中にはものもたくさんあります。ただ，「もの」といっても自然物だとか生き物も含めます。ただ大事なのはそれを集めることでなくて，それがどういう状態でどこにあるかということを知っていくということなのです。つまり周りの環境を自分が理解していくということはとても意味があります。それから，ものを使って見立てたりなりきったりするという遊びがたくさんあります。これは，先ほど探索遊びも基本的に一人で虫を探している子というのはよほど孤独な子ですよね。いないわけではないです。だけど大体は仲間と探すのです。その方が楽しいから。それから，見立てなりきりに至ってはやっぱり自分一人でなりきってかわいいでしょと言ったって，あんまり面白くないのですね。今日もいろいろな場面で結構なりきっている子達がいましたけど，それはやっぱり周りの子どもと同じように身に付けたり，歌ったり踊ったりしてイメージを共有できるという，イメージを共有することが実はこれから大人になっていくときに必要な芸術文化の理解につながるのです。いろんなお芝居だとかダンスだとか踊りだとか，すべてそういうものが何かを見立てたりなりきったりしながら，基本一人ではなく集団できれいに展開しますよね。見ながら自分もそこに入っているような感覚におそわれる，そういう風にして自分の内的な世界を豊かにしている，またそれを一緒に楽しめる人も増やしているということなのです。だから芸術的なことなどはこれがすごく大事になってくるのです。それから，ごっこ遊びというのはそれのさらに応用版でイメージをいろんな形で共有して，しかも協同的です。全部同じではないですよね。いろいろ違ったものをうまく組み合わせながら街をつくったり，それからお店をつくったりだとか，そういった意味で将来の社会のイメージづくりみたいなことを重ねてやっているわけです。それから，ゲームとか競争というのは，先ほど言いました通り園生活で言いますと運動会，それから２歳未満の子どもが運動会に出るというのは，何かを演ずる，ゲームするとか走るとかというよりもむしろやっているのを見るという，３歳以上がこういうことをやっているなということを見ることによって，その集団で一体的に活動する気持ちよさ楽しさを味わったりとか，ああいう風にみんなで動けたら楽しいだろうなとか，それからみんなでリレーを応援しながらいずれ自分もああやって走りたい等と，そういう風に見ながら成長のイメージ，自分がそれに向かって成長していくんだ，それから園生活にはそういう楽しみがあるんだ，そういったことを位置付けていくということは大きいです。そういう中で，本当に簡単なことを少しすることによって参加しているというイメージをもっていくのです。だから，午後に割と年齢の大きい子ども達の楽しい踊りだとか，

リレーがあるのに，２歳未満は午前中の短い時間でなんか自分たちでできることをちょちょっとやって，ああよかったわねとそのまま帰してしまうというのは，もったいない話ですよね。文化を楽しむ。スポーツ的な文化を楽しむということの原点になるわけですからね。でもあまり長い時間いると疲れるのでその辺はうまく疲れない程度に，もし保護者と一緒であったら，私であったら保護者の所へ戻して一緒に見て応援してくださいというくらいにします。それで今日実際にそういう場面があったので，それを写真に写しておきました。これは年中児がパネル版を使って乗り物をつくったのです。いわゆる構成遊びですよね。規模の大きな。これはとてもうれしそうに遊んでいますよね。さすがですよね。かなり毎日やっているのだろうなという気がします。これが先ほど言った紙の容器に土粘土をたくさん詰めてある形をつくったのです。ところが入ったのだけれども外せない，本当に苦労して一生懸命はがそうとしているのです。でも結局，バラバラになったのです。そして，またやり直しをします。難しいですよね。一生懸命きれいに形を取ったからうまく取れると予測したのだと思うのだろうけど，一人で黙々と探索しながら自分で考えているという場面です。でも彼はそう簡単に人生あきらめないで偉いなと思います。これも年中さんですけれども，黙々と剣づくりをしています。これも造形，形をつくるということですけれども，座り方からしてもうしっかりとという感じがしますね。ちゃんと足をハの字型にして，ついでにつくっているという感じではないですね。プロのつくり方という感じがしますよね。でもこのようなことを見て，遊び込むということは，外に集中しているということが表れてきますよね。これは探索に向かう子ども達です。これから虫さがしに行くというのですね。みんなそれぞれ箱をもっています。何を探すの？と聞いたら何種類も言っていましたね。ダンゴムシだけではなくて，たくさん言っていました。知らない名前もあったので，覚えきれなかったのですが，子どもの方がよく知っていて，それだけ遊び込んでいる，探し込んでいるという意味ですよね。これも，３人いて先生もいるのです。何を言いたいかというと，乗り物に乗ってなりきっているのだけれども，この子を見てください。クマちゃんをおんぶしている３歳児。１歳くらいから人形をおぶりたがりますよね。３歳くらいまでいくのですが，それを過ぎるとおぶらなくなりますよね。不思議だなといつも思いながら，この子はなんでくまちゃんなのでしょうね。きっと意味があると思うのです。なんか幸せそうな顔ですね。それに比べるとまだこっち子の方が不安感が強そうですね。もう一人の子はどうでしょう。この子はなりきっていましたね。いいですね，３歳児はすぐになり切れてね。もっとなりきっていたのは，この子です。じつは二人いるのです。この二人で，アナと雪の女王でしたっけ？これのセリフと歌を歌いながら，完全にその世界に浸って，見ていても楽しそうだなと思いますね。よい時間を過ごしていますね。ただやはり遊び込むというのは〇〇遊びと名前を付けますけれども，こちらが何を楽しんでいるのかというのを見るための指標です。なりきっているということを見たい。確かになりきっているのですが，なりきるためには

踊れる場所と衣装が必要だなということが分かりますが，でもこの二人で遊び込んでいるということが面白いのです。今日見ていて思ったのが４歳は二人のペアが多いですね。いろんなところで二人から三人，でも二人でいて三人目が来ると，結構拒否されていました。なので，あちこちに二人の世界がありました。おそらくイメージの共有がしやすいのだと思います。三人になると実は揉めるのです。二人対一人になる。それが嫌だと，二人で十分なのです。だから私と気の合う子だけでいいのよという意味ですよね。これは５歳のサッカーです。ずっとサッカーをしていたのですが，早い時間は人数が少なかったです。そうしたら，一つのゴールに向かってせめて，キーパーがいて，シュートをして点数だけを数えるという形でした。ところが，人数が多くなると，帽子も青と白に分かれて２チームになり，ゴールも別々につくって対抗戦の形に変えていくのです。こうやって５歳になれば状況に応じて集団遊びの面白さを自分達でルールを変えながら楽しんでいるということがよくあらわれます。このように瞬間瞬間ですけれども，結構いろんな種類の遊びを楽しんでそれにじっくり取り組んでいるという気がしました。

遊びの中の学び＝幼児期の教育，これが一番いろんなところで誤解され始めているところなのです。幼児の教育というと幼児期から文字や数を早く教えた方がいいだとか，英語を教えた方がよいだとかそういうことではないのです。一つには園の環境を理解していくということ，環境を理解するということは自然や生き物，身近な環境との触れ方，どうそれに触れるかそしてそれをどう大切にしていくか，生き物の命を大切にするということまで含めていきます。ただ命が大事だよということをちゃんと伝えることが幼児期の教育でもあるわけです。それから，遊具や道具の仕組みや操作を理解し，例えばシャベル一つにしても，手シャベルとスコップは違う，深い穴を掘るには手シャベルではないですよね。そういう風にしていろんな道具を使いこなせるようになっていけるといいですね。またいろんな素材も使いこなせるようになって，つくりたいと思ったらどういう素材なのかということを考えていけるかということですね。実はこういうものはすぐに結果は出ないのです。だけど，今の素材の話でいえば，自分が将来いろんな商売をした時に，いろんな素材を知っているという経験が，また良いものをつくり出すことに繋がるのです。それからもちろん，文字や数量，図形などを遊びの中で，体系的に理解して組み合わせながらいろんなゲームをするなどは入ってきます。でもそれを抽象的に学んで，正六角形，正七角形などとそれもできるだけ早く判断して言いなさいということではないですよね。意味がないですよね。ちゃんと意味づけていかなくてはいけないです。こういうこと，「もの」と「こと」です。「もの」を理解していくということになります。二つ目三つめは，園の生活を理解する，あるいは園の文化を理解していく，この辺が皆さんがあまり思い浮かばない，つまり生活というと生活習慣のように思いますけど，生活の中にはいろいろな大事なことがあります。例えば生活の展開，登園して朝何時くらいにはトイレに行って，何時くらいには食事して，何時くらいにはお昼寝などと，生活の

進め方，あるいは取り組み方などを学んでいくことが乳児期の教育でもあるのですね。いちいち言わなくても自分で分かっていくということですよね。それから生活の仕方というのは，天候が変わること，例えば雨の日と晴れの日は違いますよね。それから風の強い日と風のない日は違います。湿度が高い時とそうではない時も違います。そういうことに合わせて，どういう風に生活することが自分の体を健康に保てることかということを知っていくことが，当たり前の生活の理解という教育なのです。それから，季節によって衣替えする，靴も冬は長靴だとかいろいろありますよね。つまり，当たり前の周りの世界，一緒に生活する世界を当たり前に分かっている。そして自分がそこの主人公にもなっていて，いちいち言われなくてもちゃんと自分でそれを理解し，楽しんでいくことができるという，これも教育なのです。文化というのは，生活の中で何を大事にしているかという文化なのです。例えば，ある園に行くと挨拶を気持ちよくかわしていくなどそれが園の文化なのです。全然挨拶をしない園だと，行ってもブスッとしていて，おじさん何しに来たの？なんて言われたりして，でもそれが当たり前かなという園だってあるわけですよね。ないことを祈りますけれども。つまり園としてどういう価値観を大切にしていくかということによってだからそれをいいように，いい方向に変えていくと，挨拶をしないよという子がいたら，気持ちよく生活をしたいから，出会ったら挨拶するんだよ，別にあいさつの学校運動がはいっているからではないですよ。気持ちよく生活をしたいからであるとか，それから半日くらい遊んで，食事という区切りを一回つけるために，その後お昼寝ですからかたづけを丁寧にするんだよという風に，今日も随分丁寧にしていたでしょう。そういうことになるわけです。それを嫌がらずにできようになっていくことだって，乳幼児期の教育で大事で，それは人格にかかわってきます。使う時だけ使って，あとは誰かがかたづければいいやなんていうことではないです。それから，行事ですよね。誕生日会などいろいろあります。行事の意味を段々理解して，やっぱり自分がそういう行事という文化をそこですることの意味が分かってそれも自分が参加して，大事にしていきたいというそれも地域に生きるということの意味ですよね。こういうように，生活だとか地域だとかを当たり前にしていくことが，当たり前すぎて教育的な内容とは思わないかもしれませんが，それがみんな教育的な事柄なのです。それは割と大きな言葉で，社会教育といいますけれども，別に社会とつけなくても教育そのものですよね。最後が，仲間を理解していくということです。これは，自分が仲間とかかわるときに，先ほど「ひと」にはいろいろありましたが，基本的には友達など仲間を理解しています。その時に仲間と理解し合うためには，ちゃんと言葉で伝え合えなければ駄目であるとか，意見が異なるときには，どうやって調整するのとか，力ずくではないでしょう。先に言った者が勝ちではないですね。ちゃんとお互いが納得するように，対話的に話し合おうということを伝えていかなくてはいけないわけです。これも教育です。こう考えると幼児期の教育は幅広いでしょう。これは教育基本法に書いてあります。その中の第１１条に幼児期の教育は人格形成

の基礎を培うものであると書いてあります。それから，もう一つ学校教育法，学校教育の中で幼児期の教育の意味というのは，義務教育およびそれ以降の学びの基礎を培うものであるということです。そういうことを思うともう一回，幼児教育あるいは幼児期の教育というもは何か，決して英語が悪いわけではないのだけれども，英語そのものが幼児教育であると思ってもらったら困るわけです。たぶんそれは外国の人と知り合うとか，外国の文化に親しむとか，逆に日本の文化を外国の人に伝えられるとか，ちょっと高度になってしまいますけれども，そういうことを含めてやらなければならないということです。

小学校以上では，いわゆる授業という形で先生と対面式で重要な事柄を伝えて短い時間の中で一斉に理解しますよね。授業とはそういう形です。では乳幼児期の学びはどういう形かというのは最近発達心理学的には明確になっているのです。それが正統的周辺参加論というものです。これは簡単なのです。波紋なのです。これは子どもが何かを学びたい，何かに取り組みたいと思うきっかけの一つに，熟達者の活動を見るということなのです。つまり上手な人の活動を見ると，憧れるのです。そうするとそのそばに行って関心をもつわけです。だから保育指針や教育要領で興味や関心をもつということにはいくつかのルートがありますけれども，その中のとっても大事なことの一つです。例えば，４歳の剣づくりではだれか最初にやっているのです。そして上手につくるのです。そうすると周りの子が自分でやっとつくれるようになった剣ではなくて，サーッと丸めてピンとしているよい剣をつくりたいと思うと，格好をまねたり，そばでじーっと見てたりするのです。時には教えてもらえるかもしれないです。だからそばでそのやり方を見て学び，自分も参加する，熟達者がいて，そのそばで見ていた子達が参加して段々熟達していくわけですね。それが第２陣です。そして繰り返す中で第２陣が第１陣と同じような熟達者になるのです。そして違うところで剣づくりをして，それを見た子ども達が第３陣でまたやりたくなるのです。波紋が一つポチャッと関心があるというものができたら，それがどんどん広がっていくのです。それは１時間２時間という話ではないですよ。２日３日，一週間という単位なのですね。小学校のように一度に学ぶのではなく，波紋のように学んでいくのです。そして半月ぐらいたつと，クラスの子が剣づくりが上手になっているねという話なのですね。そういう風にしていろんな事柄を学んでいくのです。だから興味や関心があって意欲で身に付けた態度，それがねらいの所に書いてあるのです。この学び方，周辺参加理論というので見るといろんなことが見えてきます。今日の遊びも随分そういうものがありました。でも結構みんな熟達化しているので，誰が最初に始めたかなど分からないですけれども，これが途中だとよく分かるのですよね。それをまとめてみますと，次のようなことが言えます。こういう風にして，こういう方向で，いろんな「もの」，「ひと」，「こと」を学んできて，その中で何が育つのかというと，２つ書いてきました。１つは，体を自由に動かせる楽しさと心地よさ。２つ目が友達とイメージを共有できる楽しさ。３つめが周囲の環境を自由に操作できる楽しさ。４つ

目は友達と相互理解し合える言葉の獲得。５つ目はイメージしたことを自由に表現できる楽しさ。もうそろそろ気が付きました？この１から５というは，３歳以上でいう教育内容です。その基礎になるようなことが０歳から２歳の間で育っているわけです。ということは，幼児教育とは何と悩む必要はないわけです。これまで平成元年から繰り返し教育内容として示されているというわけですね。それと何も変わっていないよという話です。個人的には，そういうことを楽しんで出来ることによって，自尊感情，やっぱり自分が自信がなくなってきたら困るわけです。自分が自信をもってみんなからも認められる気持ちが育ってほしいし，もう一つは，ちょっとした困難くらいは仲間の支えを受けて乗り越えていくという，この逞しさをもってほしいなと思います。だから遊びの中で挑戦，５歳くらいからすごく挑戦的な遊びが出てくるという園があるのです。それを全然大事にしない園はそれが出てこないのです。最近巡回相談に行った園では，〇〇クライミングというものが流行っていますよね。それがその園にはないのです。ない代わりに，壁と壁の横に結構重い棚があるのです。そうしたら，両方に手を広げて足を出すと登れるのです。それをクライミングという名前にして，流行っているのです。いいじゃないですか。ちょっと危ないようでしたら，もう少し安心できるように変えてあげればよいじゃないですか。もっと簡単なのは，小学校に登り棒ってあるでしょう。その２本の棒の間を手で握り，足をずらして登り，早いですよね。すぐ上がっちゃう。そうすると熟達者だから他の子が羨ましそうに見ながら，一生懸命練習している。そうやって自分の体を思い切り動かす。仲間と一緒にそれを楽しめる。そういったことに挑戦していけるようになると，随分違ってきます。逞しいなと思います。小学生になるといろんなことがあるのです。めげそうなことを友達に支えられて，ちょっとめげるけど乗り越えるという，そういうものがないと，それこそ避けたりとかね，段々自分が縮こまっちゃうことになってきますよね。もう一つは人格形成の基礎が育成されてくると書いてあるのですね。教育基本法に。しかしその内容は何も書いていないのです。それで，人格形成の基礎とは何かなと考えて，私が思っただけですが，例えば何かに取り組むけれども，すぐに投げ出す人はちょっと一緒に仕事はできないなと思います。そう思うと物事に集中して取り組める人，簡単には投げ出さないという人ですね。それから，自分だけやって他の人はどうでもいい，自分の思い通り進めたいというのは嫌ですよね。そうではなくて，周りの人と助け合い話し合いながら取り組んでいける，これでないと人格者，人格ということが育っていると思えないですよね。それから自分からしたことに対して，責任感を感じられる人，すぐ誰かの責任にしてその人を責めて自分はさよならというのでは困りますよね。それから簡単にあきらめないということに入りますけれども，物事に柔軟に取り組み，もしこういうものがなかったら，代わりにこういうもので何とかならないかというなどと，いろんな柔軟な創造性を発揮できる人，そういう人はすごく助かりますよね。大学でみんなでピクニックに行きました。ところがお箸を忘れてきました。「どう食べますか」と聞きました。

そうしたら，圧倒的多くが箸に代わるものを探すというのです。それはいいのですよ。でもめんどうですよね。私は，「手をきれいに洗って手づかみで食べる」と言いました。「えっー」と驚いていましたが，柔軟でいいじゃないですか。ついでに「インドにいったら当たり前のことじゃない」と言ったらみんな笑っていましたが，やはり幅というものを自分で広げて考えてやらないと，何かものを使って食べていたら，ものじゃないと食べられないというのはありえないですよね。それから，情緒的に安定して過ごせること，これは大きいですよ。特に段々と年齢を重ねて情緒的に安定できないと自分的にも苦しいと思うのですね。いろんなことがあってもちゃんと話し合いながらみんなが気持ちよく過ごせるようにということです。プラス自分に対しては肯定的な気持ちをもてるということです。いつも自分の人生を嘆かれても困りますよね。どうですか，これは遊びの中に書いてあったことのほとんどじゃないですか。集中力，助け合い，あきらめない，柔軟な創造性，情緒的な安定というのは友達とケンカしないで相談ができると書いてあります。自尊感情，自己肯定感。よく遊べる人は，よく遊んだという体験のある人は，人格的にはこういう道を歩みやすいという可能性が高いです。私も研究したわけではないですが，常識的に考えてもかなり重なるなという気がします。

子ども達がほんとに遊び込んでいるなという場面をいっぱい写真にとってあります。ここから皆さんは何が保障されているから遊び込めるのかを見るのです。3歳ですが，それぞれが自分のものをもっているのです。だから「3歳児に交代で使おうね」と言うのは，だめです。「好きなものを選んで持っておいで」と言った方が，情緒的に安定するのです。しかもよく見ているじゃないですか，自分で遊んでいる子もいるかもしれませんが，ちょっとあれだったらこっち見ているかもしれませんね。小さい子がお互いにいっぱい見ているのです。さっきの周辺参加理論ではありませんが，いろんなものをどうやって使っているのかなと，楽しそうだったら集まってきて，同じようなことを始めます。3歳の部屋のトンネルの上に立っていた子がいて，彼はなんであそこに立ちたいのだろうと思いました。先生は勇気があると，あそこに立つのは難しいから上手だねという言葉を掛けていましたけれども，多分違うのですね。このまなざし，何か遊びを見ていますね。そういう思いでこの場所に立つとちょうど年中と年長と園庭と全部見える絶好の位置ですね。いろいろな場面で自分の中にやりたいことだとかどうやればよいのだとかいっぱい蓄積できる場所です。多分そういう位置に保育をすると全体の安全を守れるのです。それから，ベッドと箪笥があって他の人が簡単に入ってこられない雰囲気にして，見てくださいこの二人を。くっつき虫で，この子が今遊びに入りたいのですけれども，布団で入れないようにして，この子は入れないようになっています。こうやって，4歳ですがお互いがお互いを理解しあって言いたい放題言えるようになってくるのです。お互いがお互いを出し合って納得していく時間，場所が必要なのです。今日も二人ペアであちこちにいましたよね。みんな，閉じたような環境をつくって邪魔されないところにいるのです。恋人関係の始まりのような感じで。これは5歳

です。この口です。この上に大きな木があって，雨だれが落ちてくるのです。それを口で受けているのです。４人が列になってアムッとしているのです。イメージが共有できているのです。周りの子も口を開けていますね。周辺参加ですよ。面白そうなことはすぐにこうやって広がっていくのです。雨を口の中に入れたことはありますか？難しいですよね。幸せそうな表情でいいですよね。これは４歳ですね。ここで遊んでいることと，この子がやりたいことのイメージが違うのです。水を汲んであけようとするのですが，他の子が「いらないよ」と言うのです。一生懸命汲んできても，いらないと。だからやりたい気持ちと求められるものが違って寂しそうに待っています。ところがしばらくしたら，一生懸命水汲みしています。つまり認められたのでしょうね。水が欲しいと言われて急ぎ足で水を汲みに来ているのです。よかったなと思いました。しかし，こういうやり取りをしながら簡単にあきらめずに，自分が認められていくということがいいですよね。それが簡単にもう知らないと怒るようなことではないと思うのです。そばでずっと周辺参加をしていていつか自分に水が欲しいと言われることがあるかもしれない。そうしたらそっとそばで見守っていることもよいかもしれません。そうしたら，水を汲んで来て，いつでも流せるぞとチラチラと見せながらやっていました。その成果が出たのでしょう。そして，やはり保育者が大事だという話です。最後の帰りの会を見ていると，先生が入る前と入ってからでは違います。先生が入ると引き締まって集中してきます。４歳は先生が来る前から結構楽しそうにお話をしています。４歳ですが，このパネル版が雨でぬれていたのです。そして，しまう時に先生が雑巾を持って来てきれいに拭いてしまおうかということを提案したら，みんなそれがうれしかったらしくて，この子が一番凝っていました。凄く丁寧なのです。自分の膝の上に乗せてきれいに水分を拭き取って戻していました。よいですね。これも文化ですね。自分達で使ったものを自分達でもとに戻せるという価値観もあるし，全然嫌がらないということです。

写真ですとある程度でしか切り取って話をできないのですが，園内研ですと，園の先生方であればその前から流れがもっとわかるわけです。そうするとかなり大事なことが見えてくる気がするのです。皆さん方の園と比較するのではないと思うのです。どこが違うのだろうとうまく見えないとすると，多くは環境だと思うのです。さりげなくつくってある環境ですけれども，大事な要素がたくさんあります。例えば，園庭の真ん中に大きな木があります。その木の下で休んだり遊べたりする。皆さんの園では，そのような木がどこにありますか。子ども達は木の下が好きですよね。それを実際に使っているかどうか。使っていなければただの眺めるだけの木なのです。使うようになるとその下が魅力的な場所になるのです。例えばみんなでバーベキューごっこしようと誰かが始めれば，みんながすぐに真似したくなるような楽しい活動になります。だけれども，木があってもそれをやろうという発想が保育者になければそれはただの眺めるだけの木です。それから，砂もそうですよね。できれば砂場というのは，０歳から５歳までみんな一緒に遊べる場所なのです。た

だし遊び方が違うので０歳と５歳が一緒に遊ぶというのは危険性を伴いますよね。だけど一緒に遊べば５歳は０歳児や１歳児を気にしながら遊ぶので，そんなに危ないことはないです。遊び相手になってくれることもあります。しかし，毎日そうだと５歳らしい遊びができなくなってストレスがたまると思います。そういった意味では，砂場も小さい子用と大きい子用とじっくり遊べる砂場になっているのかどうかというようなこともありますね。そして，先ほどの３歳のお話ではないですが，そこにはたくさんの子どもがいてもそれぞれが選べるだけの遊具があるか，という話です。ないとみんなで取り合いになります。そうすると順番にという話ばかりですよね。一番初めに覚えた言葉が順番というのはたまんないですよね。それはやはり環境が悪いという話になります。そんな予算はないとおっしゃるかもしれませんが，いろんなところにシャベルなどというものは余っているのです。それをきれいにしてもらって寄付してもらってもよいかもしれません。いろんな遊具は家庭ではあるのです。私も子ども達が使ったものを最終的には幼稚園に寄付しました。それから環境で大事なものは時間なのです。先ほど言ったように今すぐ解決してあげようと思うと，先生が介入して先ほどのように，「○○ちゃんが水を汲んで来てくれたのだから，入れてあげな」とやさしい気持ちで言っているかもしれませんが，せっかく水を使わないようにしてつくっているわけです。何か納得出来たら水を入れてもいいよと遊びが進んでいると思うのです。そういうお互いの気持ちを調整しながら，待ちながらということができなくなるわけです。いつも誰かが何かを言ったら受け入れなければならないとか，先生がそうやってきたら言うとおりにしなければいけないのか，そうなったら展開の主体性がないではないですか。そういった意味でどう展開するかは，子どものやり方を見ていて，それを傷つけあうことは駄目ですよ。そういうことがないのだったら，どうするのだろう，こんな水を持って来て２０分も待っているけどというように，展開の仕方を楽しむくらいがよいですね。さすがに他の子もずっと待っていられると，なんか出番をつくってあげたいなぐらいは思うわけですね。そういうやさしさや展開の仕方を逆に今度は，「待っていた甲斐があったね。」「みんなやさしいね。」「みんなが水をいっぱい入れられるようにしてくれたんだ」。そういう風にかかわるのです。遊びというのはこちらが環境を適切に構成しながら，子ども達が何をしたいのか，どこまでできるのか，そこで何が育つのかをもっと知りたい，そういう気持ちがないといけないです。だから安全に子ども達がけがをしないように過ごしていればよいというのであれば，それは作業みたいなものですね。深まりもしないし，ただ単に時間をつぶせるものになってしまいます。同じ時間と同じ場があってもそれだけ大きな差になりますよということになります。これからも研究を深めていろんなことを学びたいと思います。

（文責　林　博之）